

## 堀内さんと愉しむ四字熟語 第1回「聞一知二」 ぶんいちちに

新連載

「論語名言」の鳥先生へのごあいさつを兼ねて、わたしの好きな『論語』にちなむ四字熟語からはじめたいと思います。

それは「聞一知二」（一を聞いて二を知る。『論語「公冶長」』から）です。

みなさん、特に聡明な人をほめる「一を聞いて十を知る」は知っているでしょう。十まではムリという人のために。

あるとき孔子が子貢（端木賜）に「おまえと顔回とどちらが優れているかね」と問うたことがあります。子貢としては答えづらい問いです。しかし老師が顔回をほめたいことはわかっています。

そこで子貢は、「回（顔回）や一を聞いて以って十を知る、賜（端木賜）や一を聞いて以って二を知る」と答えました。

自分をおとしめずに謙虚に他をほめるこの答えは巧みで味があります。聞いた孔子は、「そうだね、わたしもおまえも回にはかなわない」といって喜びました。

「聞一知十」の顔回は特に総明なのであり、「知二」ほどの自分も総明のうちであるという答えは、後人の賛同をえて『論語』に残されたにちがいありません。

顔回は学才に優れ、子貢は商才に長けていたといわれます。孔子晩年の講学と著作を助けていた顔回は早世して、老師を「ああ、天はわれを喪ぼせり」と嘆かせました。一方、子貢は師の死を見送って六年の喪に服し、のちの孔里（曲阜）の成立にも寄与しています。「聞一知二」のほうに生活力があるという評価がこの対話にはありそうです。しかし「十を知る」ほどには知られていませんね。曲阜の「孔子廟」には大成殿など後代の大建物の傍らに「孔宅故井」が残され、一方、「一簞一瓢」という粗食に甘んじて陋巷に住みつづけた顔回を記念する「顔廟」には「陋巷井」が残されています。



孔宅と陋巷のふたつの井戸は師弟の距離を示す証です。歩いて行ける距離ですから、曲阜を訪ねたらぜひ確認することをおすすめします。道すがら、「賢なるかな回や」という師が愛弟子をいたわる声を聞くことができるでしょう。

堀内正範  
(文・写真)



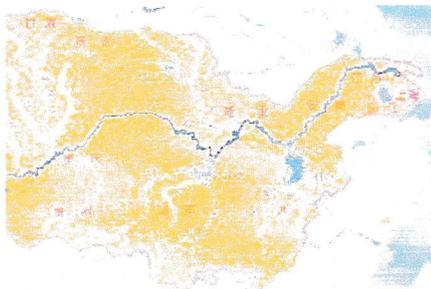
1938年、東京生まれ。早稲田大学文学部卒業後、朝日新聞社に入社。『知恵蔵』編集長などを務める。1994年に早期退社して洛陽市へ。洛陽外国語学院外籍專家、洛陽国際龍門石窟研究保護学会本部顧問。かたわら中原地域の歴史文物を探索、著書に『中国名言紀行 中原の大地と人語』（文春新書）、『人生を豊かにする四字熟語』などがある。

## 堀内さんと愉しむ四字熟語 第2回 「一衣帯水」 いちいたいすい

身近な衣・食・住にちなむ四字熟語は多いですが、まずは「衣」の一番に、日中友好の場でお互いによく用いられる「一衣帯水」(『南史「陳後主紀」』から)を取り上げておきましょう。

一条の帯ほどの「水」に、みなさんは何をイメージしますか。帯として似合う京都の鴨川か、広くとも淀川くらいで、向こう岸に声がとどくほどの水流でしょうか。でも日中間の水となると、河川ではなく海のイメージもあって。

実はこの「衣帶之水」は長江なのです。ですから対岸に声などとも届きませんし、対岸のようすも知れず、渡りやすい水ではありませんね。



長江

かつて隋の文帝楊堅が全土統一の兵を率いて南下してきて、長江北岸に達した時のこと。江南にはまだ陳国(都は健康いまの南京)がありました。

「天下万民の父母であるわたしが、この『一衣帯水』に阻まれて、「水深火熱」の痛苦の中にいる陳の人民を救わないわけにいかないのだ」

といて、船をつくり船団をしたてて長江を南に渡って、陳を滅ぼしています。

ですから原意としては、行き来に支障がないわけではないが、それを障害としないで進もうという気概が込められています。困難は予想されるけれど展望をもって対処しようという覚悟の表現です。



楊堅

日中間の交渉・交流にはさまざまな課題がありますが、それを「一衣帯水」の隔たりとして、展望をもって対応できるのは、これまでに命がけて海を渡り往來の歴史を刻んでくれた幾多の先人の営為が支えてくれているからです。

一九七二年九月に、「日中兩國は、一衣帯水の間にある隣国であり、長い伝統的友好の歴史を有する」という日中共同声明が発表されましたが、田中角栄首相と周恩来総理の力強い握手の姿は今なお新しく強い支えです。

「一・衣帯・水」ですから、「いちいたいすい」と切らずに、力を込めて「いち・いたいすい」と読むのが自然です。



南京長江二橋

文・写真:堀内 正範(ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長)

堀内さんと愉しむ四字熟語 第3回「一葉知秋」いちようちしゅう

秋が深まると、よくこの四字熟語を思い浮かべます。ひとひらの落葉をみて、静かにすすむ秋の深まりを知ることを「一葉知秋」(趙長卿「品令・秋日感懷」など)といいます。有名なのは唐人の詩からといわれる「一葉落ちて天下の秋を知る」で、微細な事象から大勢や結末を感知することに例えられます。

一葉には「一葉蔽目」があって、こちらは葉一枚で視界を蔽ってしまうことから、「一葉目を蔽いて、泰山を見ず」となり、やはり局部や少時の現象に惑わされ全局や本質を見誤ることに似ています。

キリの一葉から天下を知る意味合いの「梧桐一葉」は、明治期にシェークスピア劇を移入した坪内逍遙が新歌舞伎「桐一葉」で、徳川との戦闘を避けようとする豊臣方の片桐且元(ハムレット)の心境を象徴する場面に用いています。

ところで樋口一葉の「一葉」ですが、生涯借金に追われて、おあし(おかね)に縁がなかった自分に「葦一葉」を重ねて雅号としたといわれていますが、その一葉が、なんと新渡戸稲造に代わって、ひとひらの五千円札になった感想を、ご本人から聞きたいところです。



おあしになった樋口一葉

アシの一葉は樋口一葉(本名は奈津)の雅号「一葉」に生かされています。禅宗の開祖となったインド僧ボーディダルマ(菩提達磨、ダルマは法の意)は、南方から長江を「葦一葉」に乗って渡り、のち中岳崇山の少室山に籠って「面壁九年」の座禅をおこなって、「おあし(足)」の用をなくしたと伝えられています。



達磨は「面壁九年」の座禅をおこなった

日本では群馬県高崎市の少林寺ダルマ市が有名ですが、あのダルマ像はいまカンフー少年たちが修行する中国の少林寺で見ることはありません。政治家が当選して目をいれる情景など、留学生にはなんのことやら分からないでしょうね。イチョウ並木の落葉が片々重なって金黄色のじゅうたんになった樹下のようなすも「一葉知秋」です。こちらは風に舞い車に舞い、子どもたちが戯れる晩秋の明るい情景です。



ダルマさんは留学生のおみやげに

文・写真:堀内 正範(ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長)

## 堀内さんと愉しむ四字熟語 第4回「賢妻良母」けんさいりょうぼ

みなさんも「堂堂正正」や「山珍海味」といった語順のちがひ、あるいは「朝令夕改」や「虎頭蛇尾」のように一部の用語が異なる四字熟語に出合ったことがあるでしょう。気がついたら教えてください。

日本では「良妻賢母」がふつうですが、中国では「賢妻良母」(馮玉祥『我的生活』など)が用いられています。これは単なる語順のちがひというより、両国の女性観や近代化に女性が果たしてきた役割のちがひがこめられているようです。

日本の場合は、明治維新のあと西欧からもどった啓蒙家が女子教育の指針としました。結婚して姓を夫にそろえ、「富国強兵」で働く男子を支えて内助に努めて「良妻」となり、子女を薫育して「賢母」となる。初代文部大臣の森有礼は「良妻賢母教育こそ国是とすべき」といっています。



「賢妻良母」はテレビドラマのタイトルに

中国の場合は、日本で学んだ康有為や梁啓超が「賢母良妻」教育として移入したようですが定着しませんでした。生涯名を変えず、男女がともに働き、ともに子育てをし、平等の社会的役割を果たした革命中国では、毛主席が「女

性は天の半分を支える」(婦女能頂半边天)とあって女性の活躍をうながしたように、自立意識を持つ「賢妻」であり優しい「良母」となることが志向されたのでしょう。

謝冰心『女のひとについて』(関于女人)は男性の立場で14人の女性を描いた作品です。その描き方が「新良妻賢母」論として批評されましたが、作中の女性は「賢妻良母」型の女性です。生前、上の著作を訳された竹内実さんと刷り上がった本を持参して、北京のご自宅を訪ねる機会がありましたが、90歳を過ぎた謝女史は文字通り「賢妻良母」型の女人でした。

謝冰心  
『女のひとについて』



男性の立場で女性を書いた謝冰心の作品

戦後70年、8月15日の「終戦記念日」の式典会場には、心から平和の祈りをささげる高齢女性の姿がありました。戦場で兄や夫を失い「銃後」を支え、戦後に子育てをし、暮らしを守ってきたのです。その人生は「良妻賢母」そのものでした。

両国とも厳しい近代化のなかで、「賢良な妻と母」を必要としたことは確かです。

文・写真:堀内 正範(ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長)

## 堀内さんと愉しむ四字熟語 第5回「学富五車」がくふごしゃ

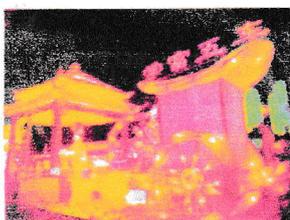
学問を志す者にとって「博識ですね」といわれるのは何よりうれしい。学識が広いことの例えとして「学富五車」(畢仲遊『西台集「一九」』など)が用いられています。車五台を連ねての量ですから想像しても半端でないことはわかります。

ご存じのように、古代の書物は竹木の簡でしたから、量の多さは運ぶ牛が汗をかき家の棟木にまで充つるほどという「汗牛充棟」にも実感がありました。



古代には竹や木が書物の材料

莊子は、政權から距離を保って「曳尾塗中」(尾を塗中に曳く。カメのように泥の中を自由に這いまわる)を貫いたことで知られますが、同時代の論客であり思想的にも実生活でも対立した恵施(恵子)の学識だけは認めて、「其書五車」(『莊子「天下」』から)と評しています。学識のあった夏目漱石も『吾輩は猫である』で、「五車にあまる蠹紙堆裏(としたり、虫食った古書の山のなか)」と「五車」で量の多さを表現しています。



学識の豊かさは「五車」の量に例えられた

さて、紙に記されて冊子になって以降は、どう例えられたのでしょうか。

宋代には「等身書」という言い方が学識や読書量の多いことに例えられています。「五車」にかわって「等身」です。その後、著作が作者の身長に等しくなるほどに多いことを「著作等身」(趙岱「陶庵夢憶序」など)あるいは「著述等身」といわれるようになりました。



紙に印刷される時代には「著作等身」がいわれた

印刷時代の「等身書」は4000万字といわれまますから、多産な作家でも稀れ。「他人が珈琲を飲んでいる時も書いていた」魯迅でさえ1100万字といえますから「著作半身」に及ばないようですが、「著作等身」の魯迅と呼ばれます。

さて、IT革命で著作が電子化されるようになって、「等身書」には実感がなくなりました。多作の人や学識のあることを表現する新四字熟語は何でしょう。IT世代のみなさんに「著作等身」世代からの質問です。それでも「著作等身」は、著作態度が等身大で、率直な自己表現によって共感を得るといった意味合いでは実感をもって残ることでしょう。

文・写真:堀内 正範(ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長)